

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2014～2016

課題番号：26704004

研究課題名(和文)チュルク諸語北東グループ未解明言語の調査研究：包括的記述と史の変遷の解明

研究課題名(英文) Research on Understudied Languages of North-East Turkic: Comprehensive Description and Diachronic Explanation

研究代表者

江畑 冬生 (Ebata, Fuyuki)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：80709874

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、チュルク諸語北東グループのサハ語・トゥバ語・ハカス語を研究対象とし、主として未解明言語の包括的記述と史の変遷の解明を試みた。まず第一に、3度の現地調査を行うことによりトゥバ語文法の未解明部分の調査研究を行った。次に北東グループ諸言語間における相違点と類似点の検証を行い、同グループの中でサハ語のみが有するいくつかの文法的特異性を明らかにした。特にサハ語とトゥバ語の対照を丁寧に行うことで、サハ語が周囲のツングース系言語からの影響を受けながら言語構造を変容させてきた史の変遷の過程を明らかにすることを試みた。

研究成果の概要(英文)：This research targets three Northeastern Turkic languages (Sakha, Tyvan and Khakas), and aims to describe their language structures and to reveal the pathway of historical change. First I examined several grammatical aspects of the Tyvan language through the linguistic fieldwork conducted in the 2014, 2015 and 2016 years. Then I compared the morpho-syntactic characteristics of Sakha with those of Tyvan. It is concluded that some grammatical properties are unique to the Sakha language, and it is highly probable that these linguistic features of Sakha have developed through language contact with neighboring Tungusic languages.

研究分野：言語学

キーワード：チュルク諸語 記述言語学 対照言語学 サハ語 トゥバ語

1. 研究開始当初の背景

チュルク諸語とはユーラシア大陸の東西に広がる同系の 30 余の諸言語を指す。これらの諸言語は、歴史的な音韻変化の結果に従って 4 つのグループに下位分類される。日本を含めた世界のチュルク諸語研究は、このうちの南西グループ・北西グループ・南東グループに集中するきらいがある。逆に言えば、北東グループに属する諸言語の文法記述はそれほど進んでいなかった。

チュルク諸語北東グループはユーラシア大陸の北東部に分布し、日本からも比較的近い。この地域の言語研究はソ連時代の水準に留まり、研究の質・量ともに不足しているのが現状である。例えば、トゥバ語の包括的記述では Isxakov & Pal'mbax (1961) *Grammatika tuvinskogo jazyka. Fonetika i morfologija.* を、ハカス語の包括的記述では Baskakov (ed.) (1975) *Grammatika khakasskogo jazyka.* を超える研究が未だに無い。これらの言語は未解明のままロシア語に飲み込まれようとしていた。

しかしながら同地域に分布するサハ語については、ソ連邦崩壊後、むしろ日本人研究者による研究が大いに進展した(ソ連時代には外国人研究者の入国自体が困難であった)。本研究課題の代表者自身も、応募時まで 13 年間にわたりサハ語の文法研究に取り組み、国内外で積極的に成果公開を行ってきた。サハ語同様に北東ユーラシア地域で話されるトゥバ語・ハカス語についても、ロシアにおける研究が停滞している応募当時、地理的にも言語類型的にも近接する日本からの研究が重要であった。換言すれば、日本人研究者こそがこの地域の言語研究をリードすべき状況にあった。実際に本研究課題の代表者は当該地域の言語研究の牽引役として、日本言語学会の第 142 回大会(2011 年)、第 144 回大会(2012 年)、第 146 回大会(2013 年)の 3 度にわたり、日本言語学会におけるワークショップを企画するなどの研究活動を行ってきた。

2. 研究の目的

本研究課題では、主として以下の 3 つの点に取り組んだ。

(1) 2 つの未解明言語(トゥバ語・ハカス語)の文法構造を現地調査に基づき記述する。文献資料の分析と現地調査(フィールドワーク)を並行して進めることにより、トゥバ語・ハカス語の文法構造の未解明の部分を明らかにしていくこと。

(2) 北東グループ 3 言語(サハ語・トゥバ語・ハカス語)における相違点と類似点の検証をすること。

(3) チュルク諸語北東グループの史的分岐の過程を解明する。北東グループ諸言語が古代チュルク語からどのような歴史的変遷を辿り分岐したのか、通時的な変化の過程を明らかにすることを試みた。

3. 研究の方法

本研究課題では、北東ユーラシア北東グループのチュルク諸語の文法構造について、主として現地調査とコーパス分析による解明を進めていった。

(1) 日本国内で入手可能な文献資料や新聞記事をもとに、トゥバ語およびハカス語のコーパス資料を作成し、それらを Language Explorer なども援用し分析した。

(2) ロシアのトゥバ共和国およびハカス共和国に赴き、トゥバ語およびハカス語の文法構造に関する現地調査を行った。

(3) 現地調査により得られたトゥバ語およびハカス語の文法構造を、応募者がこれまでに明らかにしてきたサハ語の文法構造と対照し、チュルク諸語北東グループの包括的記述と史の変遷に関する研究を進めた。

(4) 2016 年 7 月に、新潟大学において北東ユーラシア地域諸言語の記述と対照をテーマとする国際ワークショップを開催した。

(5) 2017 年 3 月に、呉人徳司准教授との共編により *Linguistic Typology of the North.* の第 4 号を刊行した。この中の論文においては、サハ語が周囲のツングース諸語との言語接触によりその文法構造を変えていった歴史的過程のいくつかの側面を示した。

4. 研究成果

本研究課題においては、主として以下のような研究成果が得られた。

(1) 平成 26 年度(1 年目)には、『トゥヴァ語基礎例文 1500』および *Ильи* 紙の 2012 年から 2015 年までの記事に基づき、トゥバ語のコーパスデータを作成した。8 月にはトゥバ共和国クズル市において現地調査を行い、トゥバ語の否定構造や補助動詞構文に関する信頼度の高いデータが得られた。この年度の主な研究成果は、9 月にルーアン大学で開催された第 17 回国際チュルク諸語会議での口頭発表などである。

(2) 平成 27 年度(2 年目)には、チュルク諸語北東グループに属するサハ語とトゥバ語の文法構造の相違点を対照することを中心とする研究を行った。結果として、北東グループの中でサハ語のみが有する文法的特異性が徐々に明らかになっていった。8 月にはトゥバ共和国クズル市およびサハ共和国ヤクーツク市において現地調査を行い、トゥバ語およびサハ語の補助動詞およびボイス接辞に関する信頼度の高いデータが得られた。この年度の主な研究成果は、7 月にソウル国立大学で開催された第 12 回ソウル国際アルタイ学会での口頭発表などである。

(3) 平成 28 年度(3 年目)には、最終年度としての本研究課題の総括を行った。まず 5 月にはロシアの北東連邦大学において、日本のアルタイ諸言語研究に関する招待講演を行った。7 月には新潟大学において、「北東ユーラシア諸言語の記述と対照」と題する国際ワークショップを主催した。本ワークショップ

における口頭発表は、サハ語が周囲のツングース系言語からの影響を受けながら言語構造を変容させてきた史変遷をいくつかの側面から論じたものである。8月にはトゥバ共和国クズル市において現地調査を行い、トゥバ語の形態音韻規則および形態統語規則に関する信頼度の高いデータが得られた。この年度の主な研究成果は、3月に呉人徳司准教授との共編により刊行され論集『Linguistic Typology of the North』第4号である。本論修所収の論文では、サハ語文法に見られるツングース諸語的特徴について、他のチュルク諸語と対照しながら論じており、まさに本研究課題の総括であると言える。

(4) 本研究課題の3年間の間には、積極的にアウトリーチ活動を行ってきた。2014年7月には新潟大学において「言語で巡るシベリアの旅 北方の人々のことばと暮らし」と題する講演会を開催した。2015年4月には新潟大学において「シベリアの民族・言語・文化」と題する講演会を開催した。2017年2月には新潟大学において「言語研究の諸問題：東アジアの言語の事例から」を「言語学研究・言語教育センター」との共催により実施した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

江畑 冬生, サハ語(ヤクート語)の「双数」の解釈 - 聞き手の数からの分析 -, 言語研究, 査読有, 151号, 2017, 63-74.

EBATA Fuyuki, The linguistic status of Sakha (Yakut): A contrastive analysis with Turkic and Tungusic languages., Linguistic Typology of the North., 査読無, vol.4, 2017, 53-66.

江畑 冬生, トゥバ語との対照から明らかになるサハ語の規則性と義務性, 北方言語研究, 査読有, 7号, 2017, 23-33

EBATA Fuyuki, Studies on Altaic languages in Japan: An overview and two recent studies on Sakha., Language, Communication and Culture., 査読無, vol.3, 2016, 48-65.

EBATA Fuyuki, Quoted imperative statements in Sakha (Yakut) --Between direct and indirect speeches--, Linguistic Typology of the North., 査読有, vol.3, 2016, 73-80.

江畑 冬生, サハ語(ヤクート語)の受身接辞・再帰接辞・逆使役接辞, 北方言語研究, 査読有, 6号, 2016, 43-52.

EBATA Fuyuki, Postmodification in Sakha (Yakut). Its atypical word-order and number agreement., Altai Hakpo., 査読有, vol.25, 2015, 133-143.

江畑 冬生, サハ語における肯否の対称性と否定を含む派生, 北方言語研究, 査読有, 5号, 2015, 5-13.

江畑 冬生, 統語的派生再論, 人文科学研

究, 査読無, 第135輯, 2014, 1-20.

〔学会発表〕(計16件)

江畑 冬生, トゥバ語の再帰に関する予備的考察, 2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2017.3.30, 京都大学ユーラシア文化研究センター(京都府)

江畑 冬生, 表音文字の非表音機能: サハ語と韓国語の対照を中心に, 講演会「言語研究の諸問題--東アジアの言語を事例として」, 2017.2.24, 新潟大学(新潟県)

江畑 冬生, トゥバ語との対照から明らかになるサハ語の規則性と義務性, 日本言語学会第153回大会, 2016.12.3, 福岡大学(福岡県)

EBATA Fuyuki, The linguistic status of Sakha (Yakut): A contrastive analysis with Turkic and Tungusic languages., "International Workshop: Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia", 2016.7.9, Niigata University. (Niigata Prefecture)

EBATA Fuyuki, Studies on Altaic linguistics in Japan., "The third international conference on Altaistics, Altaic languages 2016", 2016.5.27, North-Eastern Federal University. (Russia)

江畑 冬生, チュルク諸語における主題標識, 言語の類型的特点をとらえる対照研究会 第1回公開発表会, 2016.4.16, 大阪府立大学(大阪府)

江畑 冬生, サハ語とトゥバ語の文法対照: 規則性と義務性, 2015年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2016.1.30, 京都大学ユーラシア文化研究センター(京都府)

江畑 冬生, サハ語(ヤクート語)の受身接辞・再帰接辞・逆使役接辞, 日本言語学会第151回大会, 2015.11.28, 名古屋大学(愛知県)

EBATA Fuyuki, A new analysis on Sakha (Yakut) "dual" marking., "Languages and literatures of the Turkic peoples", 2015.10.27, The Department of Turkic Philology of the Faculty of Asian and African Studies at the St.Petersburg State University. (Russia)

江畑 冬生, サハ語勧誘形における「双数」の解釈: 聞き手の数と対人化, 2015.7.27, 第63回新潟大学言語研究会, 新潟大学(新潟県)

EBATA Fuyuki, Sentence-final clitics for propositional modality and interpersonal modality in Sakha (Yakut)., 2015.7.17, "The 12th Seoul International Altaistic Conference", Seoul National University. (Korea)

江畑 冬生, サハ語の補助動詞に関する予備的考察, 2014年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2015.3.27, 京都大学ユーラシア文化研究センター(京都府)

江畑 冬生, ウワロフスキーによる最古の

サハ語テキスト，北方の言語と文化にかんする国際シンポジウム，2015.1.24，北海道大学（北海道）

江畑 冬生，サハ語における肯否の対称性と否定を含む派生，日本言語学会第149回大会ワークショップ 北東ユーラシア諸言語における否定構造，2014.11.16，愛媛大学（愛媛県）

EBATA Fuyuki, The reflexive and passive suffixes of Sakha (Yakut)., "System Changes in the Languages of Russia", 2014.10.17, Institute for Linguistic Studies, Russian Academy of Sciences. (Russia)

EBATA Fuyuki, Double accusative causative and impersonal passive in Sakha (Yakut)., "The 17th International Conference of Turkish Linguistics", 2014.9.3, Rouen University. (France)

〔図書〕（計4件）

江畑 冬生 他，東海大学出版部，シベリア先住民の食卓：食べものから見たシベリア先住民の暮らし，2016，206（74-81, 174-181）

江畑 冬生 他，京都大学学術出版会，シベリア 温暖化する極北の水環境と社会，2015，511（350-353）

江畑 冬生 他，東北大学出版会，2014，感性学 触れ合う心・感じる身体，312（191-209）

江畑 冬生 他，勉誠出版，水・雪・氷のフォークロア 北の人々の伝承世界，2014，345（187-216）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

江畑 冬生（EBATA, Fuyuki）
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：80709874

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし